四季類題 ゆのもう利よ記

へ 5
1497

御代のめくみに咲ゆるより深山にそたち
原野にはえたる艸木の類もれしものなれ
此をすきたる人のこのめるまゝにおほくあれと
珍物も遇不遇ありて附して用ひら
珍園として賞せらるゝものかくれをし
春秋のことはなを編てさゝへる本に

5
門 利
1.497
巻

乃ちはもとより無窮の花卉なうら
いさゝかその端をあらはしこの道に
よするこゝろばせを慕ふも常なり
暮柳舎のかたはらにしるし於乾庵し

文化二乙丑三月

峯遠

凡例

一 此集は發句數題をまとめて四季の花咲く頃の城
隨ふは人安かりしなりとす一まとめになり凡草
木よ花咲きぬるそのくなりけれは外数多あるべけれ
とも堵山の井ならし其外の歌を書しるして余は
一 俳諧の拙好もありぬ歌のうち漏るるもあれと
句心のかよひぬるは其の為にもよしなかれ其十六首に過
一 季の始めしきりのかゝりし見えしも堵山の井をえとし
選りは選ばして書毎の題を求めひとつは書ふさくるよしその
一 古俳諧よりうかゝへは椿の花胡桃の花千日紅楓のおそれ都ひへ

一 孟仲季に限らずその月にあり或ハ三ヶ月に渉るものあり
順題にまじへさるは雑に書くまちくの部
あれバ其二三を除して余ハ混雑に出さんなりたゞ
ハ初櫻名櫻広がり一通をさるの題ひなり
一 不易流行にかゝハらん句の姿をまもらせんことを本
意とされバよき句に洩るゝも多かりしあしき句の入
たるもかゝりし只その人ゆかりの為にならひたる事ま
の殺なれバ後の功者の分入へき事に候もしとりすてたし
初よりあまた残記さるゝ金沢の連が所存にし
きまなりて後に改さるは省畧なり

福寿艸

春の部

加賀暮柳舎車大編

梅

福寿艸

朔日の羽に定めて福寿草　槐路

心よき庵あらんとなくしも艸　魚夫

日しらを咲ハ初よりけり福寿艸　麦風

咲初て千代のものなり福寿草　花香

福寿草牡丹乃莟をまつりける　ナガサキ 祥禾

目の前の梅乃花はくゆてそ梅の香　其水

なのしらぬ初年の春れや梅の花　観之

嗅乃墨ほと咲へてらめの花　巴石

花よりも出し月夜に梅乃花　やよひ

（春）

奥山や去年赤らし梅の花　梅角

遅咲くや豊年様乃娘ども　竹阜

照りこの枕に梅乃あるじかな　理石

月明乃川筋ゆかし梅の花　芦丈

謡寝るや嫗世ふ流るめ乃苑　可笑

松鳥のかけハ粉飛とも梅わか花　越中　蘭阜

窓ありハ障子にうつれ梅の花　惟明

[illegible]夜の影あり梅の花、　巴

梅か香に[illegible]、　丹々

様乃[illegible]の日暮かな、　渙婦

雪梅ひらけゝる梅乃山家かな　トヤマ　如岡

[illegible]にあるあすあり雲の梅、　嵐夫

[illegible]の尤ころに梅咲きし枝かな　エチゴ　驟彰

蕃の梅ひらん中へ入る日もさらん　ミノ　柳莊

[illegible]乃付る[illegible]梅かな　大津　五來

[illegible]今[illegible]て[illegible]八月の梅　アキ　可友

梅の風[illegible]入り[illegible]へし　十六　尺艾

高乃梅[illegible]遊へハうつろへり、　奇淵

[illegible]梅咲[illegible]、　布石

[illegible]梅の[illegible]白ひかな、　李園

松乃花

梅林香にハかきりのなかりけり　京 平和

たゞりくも見るや梅乃夕気色　尼 左柳

一日に蔵末といへとうめの花　鐵李

松の花神の世しし結ぶなり　素羽

其光に婦れ吹けり菜花哉　兎蓮

梢より月徹なりまつの花　呂幾

門掃けハ志らぬ憐りや松乃花　枝夕

露の花

池の色や火へ吹あふ松竹の色　祐昌

あしひきの山路も目あり露の花　可兮

営る事あるまじくの花　魚夫

椿

引簾の奥てらされ落花哉　十六 八千坊

百日十日閉し椿乃あるゝかな　一綠

つ口手向ひて椿塚けりしま　芦丈

野の水影余りけり花椿　車大

沢山に咲ても淋し椿　雲臺

ちらねこそ椿のこほれ夜の色　洵鳩

四五町ゐ落くあるなり赤椿　且古

柳さへうこかぬ月に椿哉　文茗

黄昏ニ源も流るゝや花椿　湖南

かくれ住む里の花の白椿　十六 女 籟子

花

白雲の吹定らぬ峯の花　我々
どの人も笑ひ顔なり花の山　鳥井
雉呼ぶのあはれさと燃えにけり　我舟
まだ寒し花の乱れ路白き面　雨夕
花に出し月や夜くく見て行　義雀
木の本をとふへにむの眠り花　賦仙
てらてらの浴りくやむの里　女 萬人
あの中に越遅く山のかさね　東涼
かくれてる花ある中乃芸東る花　對山
花の雲よるき程槻のある月夜　山甫

二ツ三ツのものふくしてくりむかのと　酒斗
暮るゝさきに吉野にありて花の山　松雅
盡きず新芸の乃花盛り　梁藿
呼子鳥静かに奥ある花の雲　ノト黒ミ 玻井
何と形く世にある宿落によする　越トヤマ 呉山
志のぶくや花の流るる山の春　タカヲカ 牛窓
並ぶ子に雉子啼く花盛　エチゴ 几丈
散る花も花そ人の集まれ　文池
深山木に月はさすなり花のあと　カヒ 可都里
何なく捨てる花の道の跡　アフミ 鷺泊

日の暮はしら(?)残る桜切なるさくら哉　九皐
遅咲ぬ日を翌日として桜の花　狸笑
花の中の連もあるなり桜　花養
世の中は此豊年に桜咲なり　其静
タカマツ
常あらんとして神乃手へ　秀来
イトツラ
照るや桜へ渡る川の末　岸芷
松任
一本の桜さかせる小堂哉　可紅
モト吉
往にしても花さく桜哉　春耀
押かけて来しむかしの桜哉　陸海
女
糸桜またなき人乃塵　誼容

櫻

夜の更は竹筒挿して長あり　十二　越鳥
夕虹乃花は雲の渡しの浦　李園
ハリマ
若葉の風暮ても寒しぬなか　瓜坊
行くや雲より奥なる初桜　云和
日ぶると紙は嬉しや初桜　挑里
幾梢並ぶつらなき桜かな　竹阜
女
宮かくりて高き社乃桜哉　みつ
まだ雨に濃くなる谷の桜哉　文渓
替るもの是さりとも咲く桜哉　可水
サ
朝日の露にすまぬ桜かな　一思

見しらぬ兒のたゞり山ざくら　女 きくの
文房ともなふ人先ちるさくら　ゝとよ
葉桜構りしき人見しみたり　波夕
者ちりしや大きな葉桜かな　エチゴ 路丈
葉川く散る嵐の合さくら哉　京 芦涯
葉月あわら小雨一つも葉桜　十カサキ 今風
山の井乃温も好なりし遅桜　蘂吹
松や桜已ヶ細花ちる紙なり　京 月居
かさりあるあと宮寺は桜の郷　十二八 巴陵
葉りし仁田の雑され女桜かな　カヒ 蝌守

接骨木

松や桜是も月出かゝりけり　漢甫
接骨木ちる晴るゝ母恋り花　古竹
接骨木乃花よりうゝる遠き日や　賦仙
接骨木の花のをかのや麦葉種　東谿
接骨木の枕乃下に匂と咲よかり　階凉

銀杏花

銀杏乃咲かんつもし後夜の月　浪叔
鳥羽も銀杏の花とやさしき花　花井
銀杏の咲かいたく星宮し　階凉

芙蓮

芙蓮乃花先のゝなり人通り　凉之

木瓜

山寺のなかり測る木瓜の花　空戸

樝

蒲公英

蘿蒡

棠花

薊

木瓜のくれなゐとはあかる子絵迹　素好

樝乃花房長し峯ぶし　瓢声

志らしくたゞ摘もよし鮎し数升　蘿春

たんぽぽのさかぬ土のゝ日乃中　古樝

蘿蒡咲て画よのそむ目も葉隠　綾窓

梅あとの心とりてくれあつめ　如亮

りんあ蘿蔓乃れすりも見ぬ薊哉　松高

花なき剃る草にきるの草も能し　階涼

炙しよ花は咲ても似よみあり　女 義石

乾よ枯みと康の喰物剃り能　其如

赤楠花

菜花

峯の雲志んしほりけり石楠花　文渓

岩水のこぼれかゝるや赤楠花　眉白

菜の花や海引つけて咲にけり　亀文

取まはして菜の咲されは梅の花　(モリモト) 十寸見

摘さしの萱や菜の咲出る春　(今町) 後柳

菜の花よ瀬にちらされる成にけり　(ツハタ) 六賀

名残や畑が菜の花の色に咲　(越小林) 桃叢

雨の名れの下行くも水乃色　(松仕) 歯水

菜乃花やきらりと越る溝の水　車大

菜の色は何よ成やありけり　可方

菫の花や是より木路に車　了之舟木 素人

菫乃花よこもりくと入る月の花　京 蒼虬

菊の花やあしぬ御手人の夢ゝ　北巠

なの花や被咲る堤　女 籟子

菫の花に春の庭のる山辺の花　ムツ 恒丸

沉丁花

芳ハし花中我出る沉丁花　槐路

杏花

杏やさゝもあさ無く我の花　对山

杏の花といふ程に匂ひきり　甫水

榛花

神の前に春の末の榛の花　鉛蝶

打る人は折せまく花の末さ哉　得之

鶯の来て茶ヶ榛の花あらし　賀枝

静さの花さく人あるよ花さきみ　東口

櫻艸

折る庭の花よりハまけれ櫻草　周和

鶏の森にて菜の花咲り櫻艸　踏涼

九輪草

七階草勝しあ鏃ヶ下り上り　素朋

丈中の折る雨や都わすれ七重艸　綾窓

小林の花咲ともなし九輪艸　夏山

仙臺萩

露折ぬ仙臺萩乃月夜の花　五吾藻

春深き人仙臺萩を静なり　車大

桃

渺々しかつきて桃の花りうるま　五葉

命寛の立入ほやもゝの花　小草

花染に紙すよ添なり桃の花　山李

そうの花十本むれて雲ゐかな　如竹

桃咲や御所のの梅は昔なじみ　芦丈

もゝさくや漏よ通ふ隣同士　ノト宿　恩之

桃一枝節句なら袖は背負ろ　エト　葛之

四日まで桃千歳おく膳の上　フノユ　月化

桃の下也月乃出ぬなりけり　十六　弁六

山里ハ畢りかちあてもゝの花　乙風

林檎花

たとへやもも触よ林檎乃むしの色　文渓

小梅花

去少し寒し小梅のさかり　北川

花小梅斎し女人乃あそびかな　素羽

梨花

降そめし紫縄なり梨の花　宇牧

百姓の表や一本も梨乃花　花席

半日乃雨よ笑して梨の花　風乙

日見ゆる黒なりし梨の花　ノトウ川　之楓

雨の中たつさく咲し梨乃花　二元吉　和選

梨乃花香る折柄乃気高し　越荒井　如蒙

月やあると云へは梨咲あれ是　京　居然

あしの花よりも静かな傍の形　巴陵

海棠花

海棠の咲まつ見ゆる小窓の外　自松

海棠や雅やかに来て夕かほも　大演

海棠に粉をぬりしや雨の花　ノト七尾　其之

木蓮花

何となくもみへるせうすの木蓮花　東口

木蓮は恥かしけもなき葉の出　京　漢水

李花

咲出せは咲や李の木末まで　巨流

白き雛も桜乃李乱れけり　林枝

花李星も嘉がめぐりけり　由卜

山吹

山吹や何を散らぬ乃結び鐵　三十ノ　雲帯

山吹や葉の花も同じ色なから　タンゴ　白雪

山吹や笠干る家乃人来し　女　繁子

家毎に生けてちらすや桶乃水　蒼虬

咲かはらぬ根音のよりや実なき菊　京　暮山

山吹きや同じ流乃深しさ　都曉

咲かふ花やよき水ありて深さあり　啓凉

むかしの池の山吹月狭さし　我々

散るもまらぬ山吹の咲き静かなり　一芝

山吹の葉より表へ出つ泉の玉　女　うつゝ

山吹花や猿橋何の折き所　、歌の井

咲か吹きや只見しき雲のかな　一思

花通艸

帆柱に杉ハ残して花あけび　渭舟

椎にもの木なり行すゝむ通艸　如亮

やさしさに実までも似ぬ花通艸　魚夫

木通咲く人の出足や山かげ　甫水

金銭花

金銭花果つるも日なく咲ばかり　謝来

鳥の後月をく運を流しけり　巨淮

躑躅

釣夕乃山の端てらしつゝじ哉　廿 蘭友

かつらぬ猿乃浮やつゝじ　三枝

松陰もさしまゝの花つゝじ　松任 東郎

ほしい咲小庭もつゝじかなれ　山李

馬酔木

映山紅(きりしま)ともしき青葉の見ゆるり　車大

つゝ咲ぬは一里やむかしのよみ　東口

馬人のさ毎謗りまで花あせび　宇牧

人乃咲ふあせびの花やむかし哉　甫水

長春

長春やよの花ならね咲そふく　山居

長春や只蛇蜂花日和なり　後橋

長春や茨乃中にて春の花　梅宇

長春に待のけ咲る儀の都　魚夫

長春の花を秋咲なる頃残哉　如童

小米花

犬猫の足にも附在り小米花　雪雄

連翹

暮る日を数へけり室小米花　世涼

精花何倍ても木瓜哉　眉白

連翹よりん後に背戸の庭哉　素羽

連翹や児の手をとむる鉾崩　（タヽミ）矢的

連翹や皆一いろに咲そろひ　芳之

山吹に手ふれけりや連翹艸（イタチ）　後山

小米花

小米花や黄衣の月迄　賀枝

こては海や雲のうき人蹲せん　文虹

華鬘艸

生経く絵本書けりけまん草（カヽヤ）　雨菓

けまん草見さへ狂ひさえけり　京　橘堂

春菊

春きくや錦のうへの忘れ草　其汀

春菊や草の戸さし心安　後橋

夢ふ乃花よ小家の次よ咲る　東廓

樗の花

子供等の遊び誘けり樗の花　眉白

樗く乃心よ使へく樗乃花　賀枝

御殿ぬ咲ちるや身もの花　芦夫

五形

茅かき中も蛇の形ありて樗哉　栁川

五形（ゲンゲ）といへり手にとる絵か挿　可律

ちるの花は白出ふ挿く蓮（イカ）の艸　友之

丁子艸

白の花よ前へき梅花丁子草　可参

水蕗花
菫

菱乃棹にかゝれて咲にけり　堤路
氷岸にかれぬほしき花菫　花席
やさしさは我にまさりて花菫　がそ
戸口まで来て摘たり花すみれ　楚つね
花菫衣の流れ行る形られ　山李
ゆかしくやかれも菫乃咲ぬ方　碩義
古江や屋根のうへにも花菫　鳥頂
菫摘て土も松しかれて　月居
あるほどにそ菫は江にわしき花　道貴
心して手けや菫の花むしろ　邦

苡花
辛夷
化偸草
菱

かりそめの花と折る人と苡の花　魯文
夕ぐれの雨とさかへ見たり花苡　芳之
辛夷咲割と云ひけり寒の雲　純響
つま入まで照しつゝあり辛夷　野松
月影の余りにあてや花見ね　我々
乗る蝶つきかはじむる菱花葉　蘂咲
菱さくや人さらぬ里乃寝りたる　佳松
松の雨ふりはそひつりや菱の花　且古
咲けるに夕照もあり菱の花　虎文
夕ぐれの再び出し藤乃花　車大

咲萩乃下をあゆみし山路哉　松任　香山
旅心定す附けん萩か花にも　可碧
白萩やさ散るを別る森の上　梅后
骨折るゝ一日蝶の萩乃花　後柳
多くの巣乃ものまゝ咲や萩の色　ツハタ　己水
奥深き住居も人へ萩乃色　大津　騏道
毎日のおもて秋あれや萩乃花　ノイキ　田禾
むらさきの袖に弄ぶや萩の露　永　女　友菓
白萩やかくもぬ里の夕ながさ　小室
棚に萩やゆるく遊ぶ人のさかし　咲野

芽花　淋しれたる寺社の神の名なりけり　尼　宜昌
すくすくと為の雅を更に芽出けり　波夕
葵　あひしたのむかしのせしから哉　槐路
金鳳花　淋しくも寂しくも花有金鳳花　純鸞
東菊　棒しんやうつろひよう来きく　文卓
胡椒花　渡返すゆかしき紙の胡椒哉　桑夫
六葉花　六葉草も花まだ見ぬなり　六賀
黄梅　黄梅や寮の庭に咲香　己水
蘡薁　咲よなり棘乃中の花之人　松門
人に下ん座ゆく折やかへこへ　桑夫

大根花　大根乃花や有りと魂をみせ　一楸

右左畑も桜かへる花大根　林枝

藪中の家も深まりし大根　松蝶

楊梅花　やまとの花と見へて旅日記　槐路

茱萸花　なつかしき花の香りや茱萸の花　蘿浮

馬蘭　行春の跡を残して馬蘭哉　浜の森

庭桜　庭桜そ散るも見て茶のへうより　棟丸

海金砂　妹かりの三味線草も咲にけり　廉吉

夏の部

加賀貝暮柳舎車大編

花洲堂 牡丹　花洲堂主人夏月の里人愛ひけり　蒼虬

月の夜乃大きう人のみる牡丹哉　女 かゑ

月夜にも雨やとおもふ牡丹かな　タカマツ 来止

八重牡丹咲きてに茶の香も入にけり　之吉 芝浪

けふの日の新や牡丹乃傍の人　五来

ふかみくさ散りて蝶と成りにけり　ハリマ 石毛

きのふまてそれにはらんだ香る蕾　ヒコ 油丸

咲へこちて月まつこゝろ夜ならん哉　巳陵

花ふるき中のかくれそ見ゆれ牡丹　十六 魯隠

卯の花

牡丹折て向へは捷き持仏かな　平和
卯の花や梅鍬の宿のと記　梁波
うの花は月夜ふくれとも花ひかり　五葉
卯乃花や宵より待し月も今　来史
卯花や男乃折て鉢に返　と風
うの花はさてしらに咲て在　乙表
うの花や朝日沢の月の煤　車大
卯の花もちるや五月の雨乃あと　十寸見
卯乃花や白く乃庭の　思之
うの花や明ぬうちより流汲　几丈

朴花

家陰のこれよりも花卯の木　元吉 吉井　亀園
獨知て卯の花月夜見えて過し　宜石
桐の木も行く山家の朴咲き　対山
実やその澄る朴の花　賦仙

椛の花

暮暮詣る晴れや山路や花椛　文渡
うらく来もる香り花椛　松門
咲くにこそ椛のそれ花椛　可分
花もさ同じ椛かな　一抄

胡桃花

山水よ胡桃の花の滝さかり　槐旅
傘へたし介や花胡桃　桃流郭

芍薬

芍薬や人の娘も田舎めく　素羽

芍薬は赤きよ心ひかれけり　居然

桐花

我すとりとゝ赤くしく桐の花　可方

横窓へ娘をかくしたる桐の花　芦丈

日和よき田うゑよりしも桐の花　素羽

四五日の曇りけれ雨中や桐の花　越九五 里晴

静けさの頻りに睡し桐林也　几丈

杜若

短き夜の花は咲けりかきつばた　京 蒼虬

杜若濡るゝほどなる雨の小降哉　双南

ぬれ色の花よりみへて燕子花　其成

夢遊うちしめよいりや杜若　京 田禾

まこつなき言葉も心のうつりかり　馬印

あらそひしよる人もあり燕子花　三枝

松も有り竹もなりけり杜若　雨夕

杜若芦にもまじりて咲　棠里

見返れはいつも紅紫やかきつばた　女 こん川

酒載す男は見へしかきつばた　たの

かよはさもやさし紅うへの咲なら　とよ

すゝやうな心持せし燕子花　若丈

さゝ舟や樵路まで人来る杜若　其谷

葵

葵の花

杜若下葉の露手に袖ぬらし　一思
見る人の袖のうつりや杜若　うゝ
杜若奥手も来る里乃水　蒙草
咲しきし水辺をめりて杜若　南水
さらつきよやさしい杜若　其水
花ゆゑに都をさして見物な　素羽
どあふひ二尺咲りき葉すゑ　几丈
人の上気も栄より葵葵　可碧
明星も葵立ちきむ葵かな　京　丈左
早乙女の人乃頭に昔の花　可亨

棋数花

川縁や葉も交りて昔の花　林枝
古井戸の跡はかなきて昔花　可水
露抱て穂子乃跡より昔の花　簡楽
蛙鳴く日なり厂後よ葵乃花　阜丈
岩つたふ水の流してうけ花　素羽
葵の花の緑となる乃影　花席
来しけよ香の跡なり昔花　北豆
咲く白ひ何も宝棋棋子の花　文車
梅のあやひとり後へき蕃藤　竹風
柚乃花の香よかり入や八重葎　奇渕

山苣花

栬殻咲濃やかの黄ひ水　涙舟

山苣ハいさく楠ま茂ふなり　文渓

山苣や月ゆきぬま咲ちらく　大漠

誰かいふ身くても絶しすぎ哉　夏山

梗桐花

旅人乃憶あんまま来て梗梧のかも　祇蝶

手鞠花

手まり花二ツ合と流行り　文几

雅子のあそめ入けり手まりかも　浄之

白丁花

たのしくも月ハきえへ入けり白丁花　我々

咲庭のもと来たうえ詠る白丁かも　蘇基

萩

蜂の身の萩を深て通りけり　世涼

一擂て知る一羽ふりきの猪名の　女 悟宜

花あるき墨の一人かな花うち　卓大

慈悲な花持くあるき萩なる　升六

赤水と露の花乃白ひかり　如董

哀しさの宿乃一八咲よけ　松舟

要花

一八

一八の花就憚く往せり　吉竹

一八や雨の中しあゆ男かり　甫水

一八やうら挽も浮世をさびしき　越九立　甫立

一八や涼の昔く知らく軒根の外　雪推

芥子

赤ときに尾し川原を向て咲咲り　眉山

霧よりも風さはけしの一重かな　蒼虬

古里も草花植して帰しけり　蕉吹

けし咲や山里かけて日の盛り　虎文

乃し雲や門まで来ぬ杜人　秋蝶

笠ふる花散る夕風し花のけし　香山

昼寝との夜のたぐふれはけしの花　車大

白雨のはれけし散し人傘の雫かな　又艾

冬の夜の花おもしろ咲あり芥子の花　芳之

芥子畑や色様ちらみなしば　越角

散けしもとゝ見かへれば散りけり　六阿

萩桔　川越く祇入りり萩桔梗　魯文

女貞の花日南猫さ寒さかな　桑夫

天仙蓼　またゝびの花も山家乃入日かな　槐路

夏くさの花は樹しれぬ里涼し　巨流

無花果　咲神ぎいちじくの花や野仕業　吾萍

山坂の手拝よ高きやも咲さ　夏山

梅擬花　ふうしくて山又花乃梅もどき　友樹

美人草　美人草けしより之への体さよ　階涼

ありんさや花中ての名を美人草　田禾

麗春花（レダマ）　忍ぶしたや古道（ヨコ）の畠よ咲かふせ　柳丸

山吹よ咲入りへもせ女きこなき家　階涼

宝鐸花　花も今宝鐸躑よあへせ咲　鉄者斎

胡蘿草　温泉の湯や連翹胡蘿の一葉　酒斗

萩神の涼さや旁て尾乃ちま葉　車大

風車　一節に花ふかく至て風車　得之

まはしさに花うきさくふく風車　梅宇

岩蕗　岩蕗や雲雀の床を咲隠し　山居

踊花　踊花つんてや羊ふ土表乃昔なり　一草

吹うの中よ雲ろり踊花　守牧

地蔵乃掛も見へうくれうる花　従ゝ斎

苢花　灰ふとよこれ見せて苢の花　如晴

白及　蓮生のやや志らんの根ハ踏り　女 嵐友

羊蹄　きりしや叢薮よ見らうき羊蹄　松斎

虎耳草　氏うへて何ゥ謂ても虎のしこ　得之

雪掛下雲の中やありふ　甫水

拾てある石の邊りや雪の下　可水

涼しさの爲さかさゝや雪乃下　可律

花の葉よ牟も添うれぬ虎の耳　雪雄

蘭乃花　蘭乃花やこ雨よ見へる友鵆飄　従ゝ斎

蘭の花を氣を爲てより帰る遠　東涼

石斛花　いはほの極楽軒のすゞしさ　素羽

夜枯草　やゝそ乃夜枯草もをの叔　紫翁

茂りこの中をとうつく夜枯草　千里

あをゐ花　さく黒ゝ日頃の内やあを咲くより　残窓

咲く日より背の高さ成留や葵　女 黒松

脇よ咲くハ物しやあをゐ花一株　巨涯

藻の花　藻の花や二節も濡さしなの雨　魚夫

藻乃花や日ん過ぎ寸月の捨小舟　賊仙

藻花落の咲や鳥乃水よ集る　九江

藻の花乃ね林下行中よへ示　朱窓

夕涼よ流咲くをさ花藻の上る　京 百池

藻の花に行溜く浮小魚ゝ影　諧涼

藻乃花の咲くや荒等も稲の水　葉昫

河骨　河骨や流くありけり信濃川　柳九

河骨や水と忘くの物陰そ　瀬南

河骨や花の中む殿水の色　後山

河骨や涼しさよ出する乃尾　篠葉

河骨の水一寸をとるあれより　芦涯

土当帰　入相ハいつものくれを附子　自松

様本産の土よせ結る時平艸　槐路

萱艸

花咲ば身のうきよに忘れ草　文艸
春雨にみせたや月の忘れ艸　純響
見るたびにあらさ夜すりのわすれ艸　可教里
花中その花や忘れ草思ふ草　車大

金銀花

悲哀の自ひに物さりかんとする　アフミ 乙雀
忍冬花いつものへに摘れけり　大漢

空豆

空豆や花に人とも咲へる　踏涼
空豆の花は咲けり村乙る　ヱト 巣兆

夏菜

川風の涼しき気色や夏の菜　女 かの子
夏菜さしは宮との対すり能　檣堂

萍

萍の花に大きな鯉もみえ　急夫
咲隣く風萍のふつりしき　十寸見
うき艸や浪静かにてうへの花　可丸
ちる葉のこや人なしてぞ夏のむら　漢水
萍や粉かたくれば絶えず有　月居
う紀艸や隠れも流れく花の雲　可友

百合

淵中の粉もあり百合の花　女 流蛍
瀬ぼやすて押す百合の花　京 松風
草深環ひ茂るに立し百合の花　左柳
あらしむ咲く見ゐのも百合の花　長斎

紫陽花

日盛も夕も百合の姿哉　岸芷

黒百合の都帰りし添かり　此山

黒百合に影ある雲の姿かな　周和

紫陽花やうつる日の隈月の隈　東大

あぢさゐや他一折の耐へたる　芦夫

紫陽花や薄曇る日の夕日影　野棠

あぢさゐや花あく乃花のいろ　亀来

あぢさゐや下はいつもの垣根川　南桑

紫陽花によく映る雨も法師　越九丘　素更

紫陽花や逢ふ度によく移る色　京　不遷

酸漿花

かくれ家に花酸漿の咲にけり　桑夫

うたゝねの草の上に咲くさかり　八千坊

茄花

夜のうちに見たるに茄子乃花一つ　擢笑

篠懸

すゞ懸や余所のまたもさそはれ　秀里

南天花

南天の花にかゝる垣根の埃　可律

栗花

栗乃花流れ一むら匂ひけり　周和

牛窓の来る日より咲く栗の花　賊仙

古寺の柵と柘とひる栗の花　枝夕

栗の花一つ所にちりにけり　エ十コ　斗川

夾竹桃

咲きも花の盛りも夾竹桃　如売

杜鵑花　賣牛の二日酔りやさつき花　魚夫
夜に入やさつきつゝじの木隠迦　賀枝
玉簪　銀宝珠や櫛すのの内ハ涼しかり　北川
棣花　花棣紹見にすゞも花のえん　霜屋
夕影をしちして岩ふさひさくろ　一抄
花柘榴　合して影のはしや花柘榴　林枝
美しく隠れぬ人をたぬしむ花柘榴　枝夕
合歓花　目ふたぬまで淋しく涼し櫁の花　素羽
婦人の心嵐のうへとさとひかり　女ろそ
胡蝶の羽風や長し合歓のもと　笛案

花よ見へてしゝまろめ槿の花　可友
樗花　涼しさの影をとのそめけり花樗　踏涼
夕日より白ひて程しぬ樗　守牧
下艸の影白ひせり花樗　楓樗（ツハタ）
山里や色見る谷の峰花樗　玻井
梅檀乃花の雲ゐあるなり　車大
良見しや浮世の里に咲かぬ　古木
山梔子　やさしさの花の後乃黄色哉　山睟
鉄線花　鉄線や影に縦る一重垣　如童
麒麟草　何草乃中よ見えても麒麟草　巨流

瞿麦

なでしこや是ほどいふ人の欲　花井
撫子やうへは何より紫乃色　イセ　秋棧
唐衣やこれも着中の花の根　車大

石竹

石竹や淡し椿も花のあん　女　双菊
石竹も玉照君の涙のあと　繼石
石竹は余所へ移らぬ根組哉　踏涼

萱花

蜻蛉の組みて落ちし萱の花　一川
今終は蛇の巣なる萱哉　由卜
蟷螂がくの日の照付く花の色　謝来

百日紅

宗祇の続きし人あり百日紅　我々

蓮

一様につくかはらぬ百日紅　巴石
けしはらにうつろふも百日紅　後柳
花のうち實をもおもふ蓮の色　加牧
蓮の花深く浅くを分けもなし　山李
幢蝶のとまるところも蓮源し　其之
池は蓮の浮ぶ上に蓮の色　越勝森　子由
蓮の色咲くや欲界のよごれ雲　十七ト　蘿風
むかしはさぞや蓮見の花よ積　南中　北濱
こゝ蓮や錦目ありのうけれ海し　車大
白蓮や門よりうちの無心　芦丈

沢瀉

眼波

紡錘艸

蹈草

浅宵

青天に咲出したり蓮のはな　巳石

沢瀉や雲より清き女が拾ひ葉に　楙九

人住ぬ頭をし秋付けり眼波咲　東口

しきの紡錘紡錘草の花よし　槐路

紡錘草咲いても又とらんへちまの　可參

蹈草や野水に姉の衣も洗ひ　猿窓

蹈草や清き泉の古戦場　鯨夢

浅宵や茎の長くて花あり　其如

浅宵の下枝離れて咲にけり　文几

浅宵や十月の暖に集まれく　東大

浅宵の花ありてくかつらぬ　秋々

浅宵（ヘクワカツラ）里の眼醫者の暖垣　白華

虎の尾

虎の尾やしく凄さは蚕の影　後樗

廊が尾や水宵の露細て　将之

射干

射干に面白うりし人静　槐路

射干やかの国の奇しき暗　文几

瓜の花

あらよ咲く花は誰や瓜畠　暮山

瓜の花機の有りてもよき埒あり　草伯

南瓜花

瓜咲や神に安心し古摘　雪涅

古き傘をかけてもよし花南瓜　可兮

夕顔

夕くれや己とりそいろまつの庭　章丸

ゆふかほや石に雨ふる旅乃人　一緑

ゆふかほや月のくれ時を誰顔すの　狸石

夕貌や蚊打拂ふ人のかけ　蘿濂

夕顔の懐の垣も見人へ縁り　芦丈

ゆふかほや盗みるまて秋の月　東大

水汲まく夕貌の花そこねけり　イカ 若翁

押せれは戸をも夕顔のこほれけり　ヒシユ 李翠

夕への出に虫の音くれなり　斗入

ゆふかほの棚よりこほれかかりけり　月居

豆負

ひるかほの豆殻かけし雲かな　尼 宜昌

蕎麦はむや人声は小屋を移して　友樹

豆干すや岬の喰ふ道りて　やよう

ひるからの豆たらくに秋して　双南

鼓より花よ露の中をもなき　誠

楮花
蕎花
葛の花

花散くれ寒まよ緑まん楮かな　花柳

本津勝ち也蕎麦乃花の里　梯丸

葛の花二節坂乃流の音　蕎九丘 友甫

葛咲くや秋の七草ほかにしけれ　女 秋香

ほのかくと玉ハ崩れて葛の花　後山

弁慶草　兒の手に生てれなりけり弁慶草　巨流

月夢りや軒のしのぶも水もなし　槐路

綿の花　何も言ぬ人乃体くし綿の花　一艸

風蘭　風蘭は目なしの花香る白ひかり　可水

万年青　年をとりて水の好みや花老舗　簡楽

明らき里や日数る花老母子　モリ下　玉宇

下野艸　下野の花つけて花ふ嬉しさ　文虹

下野して咲ける中の男かな　松弁

紅蜀葵　思ひしる女姿や紅蜀葵の花　舩蝶

月のかげさして出るもありて紅蜀葵の花　簡楽

粘木花　ちる地にも咲くさまの花上連　鹿古

雲吹やまた鏡花咲又月山　松門

仙蓼　仙蓼ちる咲や野面乃手洗跡　雨菊

蒲花　水雲線金にもふるさとの蒲姫　桑夫

日向葵　日車乃居りそ不かなしの月　魚夫

日回りを見るや古向ふ人の笠　花席

椰の花　椰乃花咲は椰そとり上り　タカ仕　紫青

雀麦　俵人の心乃気かな燕麦草　青河

玉毬花　中の花まさ咲く夜の清水　寂風

菰花　花菰うるしてりや浮道　梅江

蕺菜(ドクダミ)　毒たミもちて尾を引鶺鴒(イシタヽキ)　猩笑

防風花　心ありし業や防風の花盛り　松任　交江

葎花　よき水よ人の跡あり花葎　車大

琴乃音の？思はれぬ花葎　女　たつ

咲之れぬ淋しや？の八重葎　暮山

葦の花　山寺の秋に芯ある葦の花　車大

椎花　世布も？？？椎乃花　イセ　椿堂

椎の花三年目？乃夕？？　升六

秋乃部　加賀只暮耕舎車大編

本願寺萱花　蕣花やすゝらし？しに生てある　純鶯

池坊立花　立花に縁ふ教世の法堂？　柴宮？

鼠尾艸　尚尾草にいまき？人よりん？？？　如亮

心より？鼠尾草を？？？？？　升六

霧の？？？？鼠尾艸乃夕？？？　車大

萩　萩？？？？？？？？？？？？　女　芦丈

？？の霧も？？りて萩の花　尼　まつ？

月代や萩あ？？？？？？？　宜昌

？萩咲？？？？？？？？？の？　女　謳容

落るより日の影長し萩の花　葉吹
一叢の萩に対して静なり　枕流軒
ふる萩にあはれさの猶まさりけり　来夫
白萩やさそふ上手が秋の風　エド　春蟻
萩芒薄の淋しさ忘れ顔　オハリ　士朗
露けさは根に返りて萩のちりかな　来止
きぬぎぬの袖引志萩のかげ　半窓
人よりは月の萩をも人のいふ　頑巌
明けりは横たふ葉をも萩の色　寿淵
萩の月露を払ひに出ぬけり　ハリマ　玉屑

朝顔

朝顔もかくしたまはぬ萩の垣　可友
萩深きまだも朝顔の垣根かな　洞丸
萩の垣根一枝も朝顔咲にけり　月居
萩の露ゆるやかなる人もなく　平和
ゆらゆらと白露とし山の萩　蒼虬
朝顔のありゆしはなくのみ　対山
あさがほや垣根を咲にけり　花席
朝顔や露なるもしてさかりなり　素羽
咲きたるの朝顔も朝顔の　車大
朝顔をしらぬ程の朝顔の　太田　鶯声

秋海棠

恋しとも〳〵ものと断腸花　空裡
断腸や秋の千艸乃花の長さ　可友
断腸秋海棠よそ見をれたり　程笑
秋海棠見人迄へよ日暮り　東口
薄月夜秋海棠は脇にあり　得之
日の影し乃秋海棠にあてられ　鹿古

藤袴

志らしと見ゆ萩より秋海棠　女 謹容
夏まり役老せて白ふ雅風哉　如晴

葉

藤の花離よ似よる住居哉　素羽
らつにの香やこ咲まきの袖よ　女 嵐支

桔梗

香を増く葉よ離よく山路哉　月居
あらそさの咲汎露の秋しま　玉字
桃る桔よにをしらにの花　得之
蒿雑もありてのち入乃桔梗哉　我之
喉滓よかりしぬ咲るの桔梗哉　地生 亀毛
やせさしてうんさき桔梗の花哉　可友
強りしぬ実ある茎の桔梗哉　女 双葉

沢桔梗

紫陽花の藤えの色の沢桔梗　蓁波

女郎花

京を出て二日乃名の女郎花　馬宋
をとこ陰へしたろきさ秋を惜よ哉　双南

えらみ出し律義乃女郎花　竹風

粧ひしぬ枝きりかへて女郎花　一線

霧しくや誰通ひ路の女郎花　女 秋香

ぬれきぬの人目に添ふや女郎花　自明

盆やもと咲きそめしかの女郎花　高松 東大

折安き花は咲けり女郎花　北亞

男へし

花粧し衣も露し男へし　一桝

伊勢が見の松は知りけり男へし　巨流

仙翁花

まつのひとつの露を掌けり仙翁花　眉山

芽切草

物好の人尋ねけり芽沙草　女 流螢

稲の花

はらくの力見せうて稲の花　石叢

ほろくに水も流れて稲乃花　素羽

鳳仙花

七種の後よ後るゝ鳳仙花　周和

沢山に咲いて見ずれ鳳仙花　一州

鳳仙花眉をそらさねと見えしき　陽涼

をのこ子は忘れぬ姿や瓜根草　ヒセン 梅月

益母草

萎れてもさし枝折よりさき草哉　文溪

旋覆花

小車の花や病める人熱る人　竹人

小車乃咲くや今来る下る人　草泊

鉄線草

吉祥の花も朝けさ花の顔　我々

蕣花

山もつんぬ生垣つゝし蕣なれ　蘿春

こゝろ子に恋しきのうへの蕣花　魚夫

木槿

挿替て是も床となる木槿哉　渓波

籬のうちへおくれ咲く月の花木槿　暮山

くまもなといへバ人来る木槿哉　升六

旗雀離れ飛ぶりの木槿かな　叢草

命しらぬきのふ乃木槿咲てより　車大

錦金花
茉莉花
曼珠沙花

花の名のそれともしらへぬなりて会　階添

押分るくちなしや茉莉花　林下

石ふめつゝ捨る氣ぞあすまんじゆ沙花　文虹

薏苡

咲頃ハ二タ人そゝるや女郎花　簡楽

ほうた夜ハ黄金も散る夜なれし　枇似

すゝ夜中の月うる夜花のひとつえ　泥舟

槐花
常山花（クサギ）

槐咲軒や態の猿猿波　女 傑宜

花の香もちらしん常山の葉守哉　、

常山咲道りや滝し練ひとき　邦

牛黒し常山花咲垣きん門　東口

枸杞花
金剛草
草の花

因仕業の證據しより枸杞の花　矢的

波ぬの小松も見へて纏つるき　陵窓

そゝ志つゝ見人家へる庭の草花　女 むし

鶏頭花

檀特花

袋しほる秋の綿摘草のそれ　支夫

ゆらぎひの地ハかりけて艸乃花　小草

乃ねの来らハ失たり芋の茎　其水

合いのり分て手折けし芦の花　李乾

艸花も咲て一度に吹たをり　踏滌

鶏頭よ黍乃露咲あらし花　芦丈

秋風乃手に咲張し鶏頭花　女 英楙

鶏頭やいつも盛りに花の色　エチコ 波東

たんをゝや呉女蘇乃一重かな記　魯文

さんさくの咲や是よりするの内　由卜

木槿

木芙蓉

野菊

烏頭

梅根の竹を傍へよりたんをゝ花　珠三

来る影のへるみかり乞木槿花　綾窓

宵〻の月を志つめて木槿花　涙〻亦

又雨夜ぐもも木芙蓉あん露哉　如水

甲斐又弱キに屋をせかりの木芙蓉　嵐眺

葉の如る陰をらへ見芙蓉哉　橘棠堂

もとやろ乃目を咲つゝく野菊哉　芦丈

咲散叢艸を縁くの三月ふ那　後山

淋しさの雨にき野菊哉　一漾

樹なめの心をともしる所かな　槐陰

花紫

紫乃花や紛緒乃ゆかりかな　東鷲

萩むらに落紫苑野の面影　槐路

白粉乃花や夜寒くなりぬらむ　雪戸

向粉花

扨ハの花れ紫残雲のうへ　賀枝

紫苑

花よ手の中にたゝぬ紫苑哉　可律

こゝろあるも傑けて通りし紫苑哉　林枝

入かる日のたけ見へて紫苑哉　守牧

露草

笠縫ふけしき明りの紫苑哉　車大

余所ありし月の紫苑と成りけり　其如

鴨頭草露ばかりそめのみちかな　其汀

蕎麦花

月草よ人のさかりてそばかゝり　可兮

露草花絶えばこそ月の出哉　可律

いつまでも山より月の昇る蕎麦　我々

家一軒ハありけり蕎麦の花　山川

軒より月の出る里ありそは乃花　几丈

山を越へ瀬を渡りし蕎麦の花（エト）　淺見

そゝの花ありし根本の描ひかり　諧像

紡纏

行人乃あそれありて見るひ草　文虹

まんなかやそこに本の株竹乃株　古木

苅萱

苅萱やむら咲ても紫の数　可方

尾花

荊薹も色ある秋のけしきかな　女 流蛍
乱るゝれ錦の色くか花薄　可水
四の竹の紀母りなり花芒　素羽
姉乃秋の見へく先り花芒　守牧
縦よ来る水とやりなり花芒　其谷
姉のゆう手よう人ほしし花薄　湖南
色ともよ岸のうへ乃月夜哉　樵夕
草の名に御世務も姉し花薄　旅仕 為休
花薄風よ趣くく人かな淋　女 かそ
すつり乳も撚よ不よ花薄　只丈

花すゝき野分の後も吹のこし　蒼虬
賤口ゝ姥のまてゝる尾花の郷　エチコ 左琴
まねかるゝ晋のうへ乃尾花哉　羽白
日乃ゝもよ山風吹や村尾花　亀堂

芙蓉花

草むしる乃人寝し後や秋の色　其争

漆の色

晴くく来る秋の小雨し旅道　階凉

鵯上戸

色よ出し鵯上戸の露りもの霜　ホロシ 鑾知

煙草花

渋柿横窓へ懐りて花煙草　東口
あちらこちと有さしなりかさ　芦丈
ていくの海して定し花たかお　浜亦

公孫草
藍の花

公孫草よく涼し秋の此頃　　梓丸

蘇芳の日和淋しや藍の花　　五葉

草よりも藍の涼し藍乃色　　青河

人の手も定まり自なり藍の色　　卓丈

蓼の花

おもしろや水かけて咲よ蓼の花　　鹿古

蓼の色照りもみぬ順あり　　六賀

蓼乃花古郡車軒し垣隣　ツハタ　　歩蛇

縷紅（ルコウ）

露巻よ組絲をとめて縷紅か　　槐路

人の垣乃内も咲よ苫乃色　　漢水

苦花

苦乃花人めも花も咲し　　曾休

千日紅

鮮やかの色見ても夜や苦乃花　　夏山

もとしあふ形よ千日紅　　一州

名も出の染と白たり千日紅　　桑夫

花野

混の花も歩行ん花野かな　　枝夕

花の野や人をぬりこの古きみ　　自明

花園のうつりハ広し是ハ弱し　　風乙

八朔梅

八月も朔日も知ハ梅の花　　升六

水引花

水引の花や一重乃二三人　　芦丈

虎杖花

虎杖の花まふりつく虫かな　　槐路

秋芍薬

たまくよ山葵も残りし芍薬　　柳丸

犬蓼
韮花
蛙艸
蒼萩
芋の花
萩の花
五百赤紅
菓

犬蓼よ穂蓼よ秀の白さかな　眉山
葉茜をし巡るころや韮の花　蘿浮
蛙艸斗よ宇をし花盛なん　階涼
蒼萩や待人をもさらに又　一柳
二つ家の月夜ゐるかも芋の花　宇牧
秋の陰あらしかりいも乃花　源氏
花あれは虫ある萩の洲浦哉　東大
わきまし香千艸の中に名利を又　柳九
秋あれて一束つみしにかれ菊　文虹
ともしびをともして向ふや葉の色　巴石

ゑびすごころひさご葉のたしなみ　浚山
酒呑の桐人がし夕桜菊乃花　素舟
白小袖二日乃ゆるもきくの花　葉吹
少まある花つきおれと葉の色　古檀
笠ぬぎて葉よりも今朝の雨　漁婦
淋しさを咲く芭蕉やきくの花　高松　広和
きくの色ともしもせぬ白さかな　ミナノ　斗川
大かたの葉よりさかるや男乃子　カヒ　何我
葉の香や声を浚ふ紅葉　希也
家くよ葉よしと節句かな　女　かね

菊とても二人のみれハさひしや　車大

菊折ハ籬乃露乃こほれけり　其成

夜の菊よ拾てゆめ此菊ぞこほれけり　李園

花のうく菊一本の白ひより　雪程

花咲く花の遠山あり菊の時　暮山

月の菊奈のみへるとりしかな　芦涯

ふきくにいてくて俣そ嵐かな　〃風

むさしハ老にまさぬ菊のさ　士朗

冬之部

加賀暮柳舎車大編

山茶花

山茶花や〃夕の前をくれなゐに　綫窓

さゝん花や日の目静に影の塵　呂延

山茶花の白き有ルもあはれなり　〃州

山茶花や穂芦まんまん花さく純　北至

山茶花や赤ハ梢乃ちるやなし　車大

水仙

水仙や節よある時もとの棚　蒼虬

水仙の花ヲかまはぬ目かな　其水

水仙や机のうしろも明し　五葉

水仙の影もつゝむ垣根かな　斗六

水仙の花や葦のかくれけり　双南

花を根に見すのあつし水仙花　暮山

虫の聲も雪に埋へし水仙花　槐路

古寺乃垣を結ふして水仙花　其之

松陰をおやとたのめる水仙花　素琳

かゝる風の端に強りし水仙花　几丈

淮門も新居見えして水仙花　叢草

さみしさの庭をうして水仙花　竹枝

茶花

茶の花や讀て纔に蕃茶　塔涼

茶乃花や霜のうへまで咲にけり　舩螺

茶乃花や炭焼寺の幽なり　必之

茶の花や川の寒さもうつりけり　女 ゑのみ

茶の花の世のかく咲て新しけり　雪雄

茶をんで花の中起る竹世廉　叢吹

茶のちる花や稀にかゝる花の露　素琳

茶花の落に鶉乃来る山ノ待　狸笑

茶の花や世裁字治山の畑続り　巳石

茶の花の下へ夜ある月あかり　ヒコ 羽人

茶乃花や枯しりつくのかくれ村　芦涯

茶花咲て寒吹る虫も念なり　蘿浮

石蕗花

菊のゝち花乃盛さへ入らぬそつハ　漢水
葉乃色や琵琶借る用に人の集り　葉草
庵ゝ掃ぬ葉の花咲けり石戸　花叔
見るやうのと静しよつハ乃花盛　月居
もとかし皆を力や律ハ乃花　イツモ 越嵐
角もれ乃文字も強しつハんの花　女 カ楚
咲るやそことなきつハの花　素羽
葉めくハ霜に文字を結ぶ花　守牧
小庭ならぬ手に消てくるつハぶき　其如
つハの花何にぬれるぬれて咲　河友

寒菊

つハの花これならさ時に咲にけり　踏源
寒菊の葉のひとり見るや松の風　車大
寒菊これハ只咲花とおもひけり　龝春
寒菊や寒なき園の花からし　奥夫
寒菊やましろれ縁に手を浸り　章丸
寒菊や身にふる寒に風呂上り　埒之
かんきくの葉しも月さ傍に　尼 宜昌
寒菊に今更秋の雨ぞ　月居
荒果し雑を白ハして冬の菊　花席
花の咲冬の籬し冬乃菊　蓮風

枇杷花

月雪のさかへやくれてひハの花　其三

ひハ乃花人ハ葉守をしたひけり　湖南

咲ぬれのあるもうち咲ハ乃花　乙風

咲ん咲て子猿の膝る日南哉　越トヤマ　其山

猿乃手にひだしくありひハ乃花　松任　塘芝

雪の日を見て冬の花咲ありけさくて　素羽

冬桜

花行く[illegible]遅きものゝ身をまかせて　魯文

静さよ冬さく咲ん冬さくら　山呼

冬桜友のなきもある日和哉　瑞源

帰り花

蓑虫の身乃失をせて帰り花　エト　成義

帰り花鶏足よりも静なり　車大

帰り花菊ハあけれど冬つらし　女　とよ

何となく見ても見ても帰り花　枝夕

馬[illegible]冬をこえて帰り花　素羽

借のあい静して居る也帰り花　ヱ吉　長閑

日南にもおちてある帰り花　ノトウ出　夆嵐

野[illegible]見よ[illegible]られて帰り花　若丈

帰り花咲くや長[illegible]の[illegible]乃[illegible]し　巳石

岩盤[illegible]よ並[illegible]の[illegible]帰り花　奇淵

小雲乃夜ハ何ともして帰り花　綾窓

冬牡丹

萬代乃松樹派や冬牡丹　蒼虬

冬の日に寒き牡丹の強さ哉　越トヤマ 巴流

静さに雪乃身のそ冬牡丹　宇牧

八手花

好人や八手の花も見ん道さへ　巨流

閑居つゝ花は横ふ八手の花　雲騰

枇杷花

枇杷の花や雨をと祈る夜は　一掛

枇杷乃咲やいつまで見てをる　玉宇

枇杷をたり好さ花の白にあり　女 郁

枇杷の花霊しやゑるゝ来る　、義石

張らる枇杷や花のをかしら　暮山

寒咲

寒咲ては寒さ中乃白さ哉　虎文

かりそめ乃花とも見へぬ寒の梅　橘棠堂

冬至梅

うきよ好き嘗しく冬至梅　林枝

寒き月裁よ夜さへとて冬至梅　枝夕

櫨の花

忘れ物の山路越もありて櫨の花　如亮

雪車乃跡なら戸口や櫨乃花　泥誘

寒椿

船ぶ水の悦る小藪や寒椿　文几

降雪まぶ気葉は寒椿　鷺声

椿葉の頼まれ持寒の光　升六

こう頼まよ日向けるよい寒椿　可方

寒梅

よきころに越出てしも長しその梅　井谷

一志きりあとはなりその梅　巌岳

冬梅やかゞも漸乃ゝんへさるま　芦丈

早梅や聖運へる生き蚕　階源

備梅乃咲窓の中神さし　玉宇

花よ香中隣衣も隠し新の梅　麦風

常は晴女のして隣衣乃梅　車大

かゞの東大乗寺の
集をあむとて南乃よる
おひよ咲る花の梅を
えてことしまた二集哉
終る春本歌花のいろ

書そひ一つて蝶のあと
後の筆にそ待られ

文化二年仲夏　蒼虬

京都書林
御幸町錦小路上
桃林堂勝田喜右衛門
烏丸下立賣上
橘榮堂勝田善助